2021 年 7 月 25 日　礼拝説教

「キリストからの祝福」③柔和な人に　　マタイ 5:1～5

先週からオリンピックが始まりました。改めて世界には数多くの国があることを確認させられます。初めて知る国の名前もありました。それぞれの国は独自の法律や政治形態を持っていて、基本、良い国になろうと頑張っていると思います。（少し漠然としていますが）毎年米調査会社ギャラップは世界の国の「幸福度」ランキングを調査しています。今年（2021 年）は第 1 位は 4 年連続でフィンランド、2 位はデンマーク、3 位はスイス、4 位はアイスランド、5 位はオランダ、6 位はノルウェイとなっています。日本は 56 位となっています。良くもなく悪くもなくというところでしょうかね。

＜主イエスの神の国＞

さて主イエスは何度も話の中で「神の国」とおっしゃいました。また主イエスを信じ、主イエスに従う者は神の国の国民とされているとも言われました。私たちは神の国の民であり、主イエスは神の国の王なのです。そもそも「神の国」とは、いったいどのようなものなのでしょうか。ユダヤの人々は、「神の国」を、ユダヤが「復興」することだと考えていました。ダビデやソロモンの時代のように、力強い王がユダヤに現れ、独立国家になることによって「神の国」が実現すると考えていました。何故そのように考えるのかと言うとユダヤはローマ帝国の属国（植民地）になっており、多くの人々は貧しく、明日の生活の保証などなかったからです。さきほどの「幸福度ランキング」でいくなら相当低かったのではないでしょうか？人々の共通の願いはユダヤの国としての自立、独立だったのです。しかし、主イエスが教えられた「神の国」は、そういうものではありません。「神の国」はユダヤの人々のためだけのものではなく、ましてや、ローマ帝国と戦って独立を勝ち取るといった、政治的なものでもありませんでした。「神の国」は世界のすべての人のためのもので、人々をこの世の闇から解放するものです。主イエスは「『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」ルカ 17:21 と言われました。つまり「神の国」は、特定の場所を指して、「ここだ」、「あそこだ」と言うことができるものではなく、「神の国」の王である主イエスがおられるところ、つまり、主イエスを受け入れた人々の中にあるというのです。人は、主イエスをこころに、生活に、人生に受け入れる時に、「神の国」に入ったのです。そして神の国の民として、地上のどんなものも与えることのできない「さいわい」を受け取ります。わたしたちは「主の祈り」で「御国を来たらせたまえ」と祈りますが、それは、「神の国」が目に見える形で実現しますようにとの祈りであるとともに、今、目に見えない形で、わたしたちの人生に働きますようにとの祈りなのです。天の御国を目指す者たちは、地上でも「神の国」の「さいわい」を体験しながら、やがて、それが全世界に及ぶことを待ち望んでいるのです。

＜主イエスの柔和＞

それでは主イエスが「信じる者は神の国の民とされ、神の国のさいわいを得る」と、力強く宣言することができた理由は何でしょうか？　それは御国の王である主が、人々の貧しさ、悲しみ、また絶望を知り尽くしておられたからです。もし、主イエスが、なにもかも恵まれて育ち、何の苦労も知らず、人々の生活からかけ離れたところにおられたとしたら、主イエスが「こころの貧しい人たちは、さいわいである」、「悲しんでいる人たちは、さいわいである」と言われたとしても、それは、そらぞらしく聞こえたことでしょう。人々は、「彼は貧困の苦しみを知っているのか」、「人生の悲しみを味わったことがあるのか」と反論したかもしれません。

主はまた「柔和な者は幸いです。」と言われましたが、「柔和」という言葉には「無に帰す」「何も抵抗

出来ない」という意味があります。それは悟るとか達観するという意味ではなく、自分のプライドや自信というものが打ち砕かれた末に自分には何も無いという意味での無に帰すということです。さまざまな苦しみ、圧迫に押しつぶされて、心が砕けてしまう、つまり絶望してしまった状態です。ですから、もし、主イエスが人々の絶望を理解できそうもない恵まれたところにいたなら、人々は主イエスのことばに「われわれの失望、絶望を分かっているのか」という気持ちになったことでしょう。

しかし、主イエスは、人が体験するすべての苦しみを味わったお方です。「こころの貧しい者は、幸いです」と言われた主イエスは、貧しくなることがどんなことかを、誰よりもよく知っておられました。コリント第二 8:9 にこうあります。「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」近頃は、経済的に豊かな人が一夜にしてホームレスになることもある時代ですが、主が貧しくなられたのは、それ以上のことです。主は、神の御子として持っておられた天の栄光をすべて捨て、この地上に人となって来られました。この落差は、地上のどんなものとも比較することはできません。主が人となられたとしても、地上でそれふさわしい尊敬を受けたのであればまだしも、主は、大工の子として生まれ、貧しく育ち、貧困の苦しみを知っておられました。群衆は、最初はもの珍しさもあって主イエスを歓迎しましたが、やがて主が語られる真理に耳を塞ぐようになりました。主は、命がけで人々を愛されましたが、人々は主を斥け、卑しめ、さげすんだのです。主イエスほど、ご自分を貧しくなさったお方はありません。

主はまた、人の「悲しみ」を知っておられました。イザヤ 53:3 は、主イエスのことを預言して、「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。」と言っています。

主はまた、「絶望」を知っておられました。人は、どんな苦しみの中でも、「救いの道がある。自分を救ってくれる人がいる」という希望があるかぎりは、それに耐えることができます。聖書にあるヨブという人は、家族を失い、財産を奪われ、彼自身もひどい病気にみまわれました。しかし、それでも、ヨブには希望の光がありました。それは、ヨブが語った言葉に表れています。ヨブは言いました。「わたしは知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。」ヨブ 19:25 ヨブは、この希望によって、生きながら死を味わうような苦しみを耐えることができたのです。

主イエスも、十字架の上で生きながらの死を体験されましたが、主イエスの場合はすべての希望の光が奪われています。主が十字架にかけられたとき、正午から午後 3 時まで暗闇が十字架を包みました。主は、その暗闇の中で「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」マタイ 27:46 と叫ばれました。主は、その言葉のとおり、十字架の上で、神にさえ見捨てられたのです。それは、主が全人類の罪をその身に負われ、罪びととなられたからです。試しにそんなことをされたのではありません。主は、人が体験するあらゆる貧しさ、悲しみ、そして絶望を背負い、十字架で死なれたのです。それは、あらゆる貧しさ、悲しみ、絶望のみなもとである罪から人々を救うためでした。わたしたちは、主イエスの貧しさによって富む者となり、主イエスの悲しみによって喜びに満たされ、主イエスが味わった絶望によって、希望を与えられるのです。

ここにわたしたちの救いがあり、「さいわい」があります。主イエスが宣言してくださる「さいわい」は、主イエスが、信じる者たちのために、ご自分のいのちをかけて得てくださった「さいわい」です。わたしたちは、この「さいわい」を無駄にすることなく、信仰をもってしっかりと受け取り、保っていたい

と思います。

絶望から希望へ

主イエスは、貧困に苦しむ人々に、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」と言われました。「心の」という言葉をつけ加えることによって、人々の目を物質的な貧しさから霊的な貧しさへと向けられました。信仰者が、他の人々と同じように物質的な貧しさに苦しめられて終わるのでなく、そこから、自分が神の前にどんなに力のない者、貧しい者であるかを知り、より神に信頼する者、つまり、信仰に富む者になるようにと、主は願っておられるのです。「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。」というのも、同じです。不幸、不運を嘆くのではなく、自分の罪を悲しみ、悔い改めへと導かれるようにというのが、主のみこころです。

同じように、主はさまざまな苦しみ、圧迫に押しつぶされて、心が砕けてしまった人、失望や絶望を味わっている人、ささやかな自分のプライドが大きく傷つけられた人をそのままにはしておかれません。その心を、神に対して砕かれたものにしてくださるのです。「柔和な」という言葉には「無になる」という他に、「従順な」、「へりくだった」、「優しい」という意味があります。つまり、自我が砕かれ、神に従順で、人に優しいということです。苦労や辛い体験を経験してますます心頑なに意固地になる人もいれば、ますます優しさが増してゆく方もおられます。神は、信仰者の苦しみを決して無駄にはなさいません。それを用いて、「柔和な」者へと造りかえ、「柔和な者は、幸いです。その人たちは地を受け継ぐから」とあるように、柔和な者に与えられる、神の国の祝福を注いでくださるのです。

「柔和な者が地を受け継ぐ」というのは、何も、土地を手に入れるという意味ではありません。これは、「しかし、貧しい人は地を受け継ごう。また、豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう。」という詩篇 37:11 の言葉から取られたものです。様々な苦しみを通って、神に信頼するようになった人たちは、この世にあっても、神の守りの中に生きることができるという意味です。それは、詩篇 10:17-18 に「主よ。あなたは貧しい者の願いを聞いてくださいました。あなたは彼らの心を強くしてくださいます。耳を傾けて、みなしごと、しいたげられた者をかばってくださいます。」とあることからも分かります。

主は「わたしは柔和で心のへりくだった者である」と言われました。自分のことを柔和でへりくだっているというのは少し漠然としています。主は、この言葉によって、「わたしは、あなたのどのような苦しみ、悩み、痛みを知っている」と語っておられるのです。また、主は、この言葉によって、「あなたがわたしに従うというのなら、あなたもわたしのように柔和で心のへりくだった者となりなさい」と言っておられるのです。そして、主は続けてこう言われました。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」マタイ 11:29　信仰者であっても、心身ともに押しつぶされるような経験をします。「なぜ、わたしはこんな苦しみに遭わなければいけないのか」という思いを抱いてしまうような状況に置かれることがあります。しかし、忘れてはならないのは、どんな苦しみも、主イエスにあっては、祝福になるということです。失望や絶望さえも、信じる者には、「柔和な者」になっていくためのプロセスのひとつであり、それは「地を受けつぐ」という祝福に変わり、そのたましいは安息を見出すのです。

「あなたはさいわいだ」との祝福の言葉に押し出されて、この一週間を歩み出しましょう。ひとりで歩くのではありません。主がともに歩いてくださいます。主と、主がくださる報いから目を離さずに、一歩を踏み出しましょう。